



俳諧古今鈔

三





再撰自草子式

日へこ

恋詞抄

せしとく我あめ恋れまふと夫の厚栞の詞より
 いちの妻のあはれはこころのたれをたれ
 代への帝に撰は事しむ恋と却あはれ
 あはれをい連言れ西式より離言のちおはる
 する恋の詞とあめをたれとあはれをたれ
 けしとくはこころのあはれをたれとあはれ
 めあはれをたれとあはれをたれとあはれ

恋詞抄

とらふしありて連遊もさ名と使へんを此能遊
よきと傳ふ新の翁向とせぬくの用ありて
四季の節をよむ曲節とよみ一〇今に梅もつた
各所へ新の翁自こを一向よむ所の名をせし
その向來の情とくつてさるる昔をさと然に
ともし翁の情にかみとあつちあるや一とせ
本所ののむけり

あさよふと後手らへはえん
かくとすれとこの浦らの翁情とせしむ
そのおれりもむらへはつたのち武陵より

伊賀よゆりそ馬の行鞍くらがらして

からさくはつと坂と後馬哉

け時とるはこれのく此翁のさるる牛もある地
とさるるあぬ服もありてむらへはの連歌
よはらさる此戯もつりつむ各所の新にかく
とそとるいよこれおありの源流よ次へ
あーにきくよむはり

かくはあり角ゆりよげよ次へ

け自ら花子よらるる壺解の両国とあひいよ
源氏よ遠むらり程とる能遊の詞のそ

と扱ふかくトもれハ船中を當りあつて
次ニあり一此用はあつてこれハ新撰ハ
心む各取ハけお七竹一うおあ一うあま
あつて及りし又ある一を懐の詩毫一

年くや猿まきせら猿の面

け向らぬり一迎幸のこととあつて
歳旦の詞あつれいそ一新撰ハ心む或
可ま格とや心む志うれハ新との心新撰
心む可ま格とい今の新撰一これと今
の御指の名目とらつて

蓮ニ云け照のおほむねハ白馬の類説ハ粗あり
一先師の遺稿も甚なとりて也所の人和
り御一御ありて軍書も多し芳師の心と子
向らし一射の祀りハ雅集あり一所の詞ハ
故翁を富士芳師の今對一我ハ一曙の
作ありしハ貞を老人此そとくと芳師を
はくとり各向ゆ一むとおそり此ハ心む
とらつと一家の所人らとと金一ハ心む自
を所らと一跡と所とまら此もあつて一先師
ハけ新と扱され一ハ一祖の詞と傳ハ

富士と云きとおもるべく芳野と云ふはとおもる
一むむう今そんけい句の香とおもひたるは
一能及の腕力と云ふて所申のまじりて
へこれの授者のおもるへいけははせも介
新向も新野も先師の遺行もあましくあら
中へ樹や又殊のらえは美を辨極めんと
くまゝ各めえや、意の山け二句と笑の金津
うて石取の撰集へは、一や、新之部と云れ
し、うふま草と天の橋立の名よあま又殊のや覺
と云あり世後草と云ふ山と云ふ名はいきより

越中と謎語とふとる也但しふ果めらとて越中
のまふとつひおおの湯殿と云ふりておあ
くこ集と云遠く部ありて、海ももり、牛も
もおそ、一棉車、おとまると流と意のこり、具
け二句と云おありて、おいせ女恋とありて
先師の句あり、後の傾城恋とありて、秋と坊
作あり、こ集の部と云らむと集と云ふ、一物
これとと和語と云此物ある、一おあ、く新之部
のまゝい、一樹と云る、雲とありて、しそ、き、う、
けるら、柳子、唐のこ、詠ある、う、う、と、ね、よ、お、お、と

とせざるのしきさるる作の形容あはしむ世
に例の象議ありて新辨の二格とあるなり
あつらに象議永の初比あはし湖南の新名
今ありて七浦や一子のむと一子はくとも
各句ありて時の口評よらら比我門の能事
各所一辨の所はあれとせしむと新辨
かたくはて新辨もあはしむとけい句とて時
こそも子此服とせけて口評格とも一子
はれぬ名の減後よりりていともかた新製
あれは左驛とせしむるは日あはしむと一子此

象評より今日の様おとらとんとて尊の服
よりけりしけ辨せやあるとて一子とて
もるに先師の没後一辨もも子とも定かく
おれぬの議論も相付る中一各もあはし長
特川宮より口評の特辨ともあはしむと一子
解奥ハ新の特辨ともあはしむと一子
うさしむとも世の特の子裁 蓮二もかくら
はれと用ひていけい新の特辨も新
飼字のきととも一子とてかくらるる
とありてかくらるる一子とて飼奥あり

の附合と儘とていひくけりしもの用とをまゐる
 物名もあまこゝあれい今世能階は用なき物と
 時代の用捨は中々とまゝにせしめしけり
 古今論ある物とあけて今世の用なきこと加へ
 し世移るくは我門より遠の人ありてけり
 名れと凡例とありし月えりより十二月廿五日
 まゝ彼り小噺竹と用たりて季細の事同じ
 あくもやとせしむけり式の制をまゐるものと感
 とも秋冬と二季の向ふやとまゝに用たりし物
 とるし少きを加へておれと今式の加減と

とい或は鉢裏と江紀といは長巻と服部とい
 おとたれと今式の用たりとい或は新舊は遠
 秋と春と花の時とまゝに用たりはたれと今式
 の割取とい或は古抄の用たりとけり今式の
 有用とるおれと今式の割取といはり今書を
 新故のきとけりて例の古式とめくといはり
 といはり温故知新とやいふまゝにけりといはり
 連年平の両書より兼載京祇の控といはり
 といはり紹巴の二百ヶ條ありし書とあり先
 といはりといはりといはりといはりといはり

古今抄卷三
下千系一斬の解ふありて一わ戸通のるとまゝに
何のなるべきはうあらん何の向まき或は何らんまを
一部の凡例とまゝもまゝ也二子てんまの跡と
まゝもして能く例の事話ちりりこゝにまゝも
の事話とまゝもまゝも人の事話しやう也
まゝもく此用とまゝもまゝ也

○春之部

即御食
世名ハ佳節ノ御食礼ナリト云フ
ヨリ節事氏節人氏御食子ノ田舎俗習

ナリ或ハ二節ト云フ詞ハ禱之儀ノ威儀ヲ止テ
臨時ノ遊ヲ云ヘリトワ或ハ朝拜ト云フ詞ヲ
人ハ節ノ詞ト成ル世等ノ俗習ヲモ知ナリ本
ヨリ能く世法ナル諸國ノ俗話ヲ知ス

降雪

世名ハ古今ノ論アリテ大昔ハ春ト云フ中昔ハ
冬ト云フ今接スニ降雪ハ冬ニ用キ所以
ナリ雪ノ班ナル形容ハ初雪氏云ク薄雪氏云ハ
春ノ雪ノ平白ナラシモ日影ニ散リテ薄雪ナリモ
寒ノ氣ノ淡和ナル故ナリ降雪ハ決シテ春日ト定
世等ハ例ノ加減氏例ノ當用氏云キナリ

雪解

廿詞ハ古式ヨリ解ルモ消ルモ春ト成セト雪
消テ氏消カニ氏朝夕ノ白ニ結ヒ洗足ノ湯モ
結タラシ三頑ニ春ト定メハ冬ニ用キ詞ナクテ附合
ノ宮ト成ル時アラシ夏ニハ解ル春ト成シ消ルラ
冬ト成ス時ハ消ル物ニ敵シテ消ヘ解ルハ我ト解
ル故ニ冬春ノ道理ハ明カニ詞ニ用ノ自在ヲ
得テ也等ヲ當用ノ働トヤ云ハシ去ト冬ノ部
ニハ新ルニ及ハス

陽火

此名ハ古式ヨリ新トアリテ諸抄ニ色々ノ説アリト
燃ルト詞ヲ添ヘス氏決シテ春ト定メキナリ鯨鯨

稲妻ノ説ハ連身ノ用ニシテ蜻鯨ノ説ハ節子ノ
沙汰ニヤ〇今採スル物ノ散回ハ毳羽月ノニ子ヲ用
テ同訓別用ト成スキナリ毳羽ハ木ノ陰ノ毳羽ヲ伝
習ハフヒノ零各語ナリ或ハ耻習ト云フ類ナリ卷
ハ散回モ群ルモ散乱ノ助語ニシテ和漢ノ通用
トハ也等ノ為ナリ或ハ忙子ノ野馬遊奔ヲ引テ
遊糸モ陽火モ同意ノ説アリト漢語ノ遊糸ハ俣
詔ノ用ニ非ス増テ野馬ヲ以テ野馬ノ説ハ俗習
ニヤ論スルニ足ラス或ハ解遊トハ湯桶訓ニテ和訓
モ例ノ覺束ナク解遊トハ連歌ノ詞ニテ何レモ

古今抄卷三

三

若葉

古式ニ木ノ若葉ハ夏ト成シ冬ノ若葉ハ春ト成シ
 成シ夏ノ葉ハ總テ新ト成セルナリ然レテ或抄
 ニ花ト若葉ノ二所ニ若葉ニ花ヲ結テ春氏云イ
 夏氏云ル何故ニ決ナラヌヤ○今按スルニ月花ハ凡雅ニ
 一巻ノ飾ナレハ踏タレ物ハ如城シテ四季ヲ自由ニ配シ
 ハ若葉ニ花ヲ結テ決シテ夏ト定レ○猶按スルニ
 此配ハ花ハ春ナリ葉ハ夏ナリ實ハ本ヨリ秋ナラ
 其ノ葉ニ若ノ一子ヲ結テ若葉ヲ夏ト成セルニ
 若芽ノ春ナル道理ヲモ知レ然レハ花ハ春夏ニ
 踏テ花ニ郭ムヲ結タルトハ入達タレ御テ此等

ラ如城ノ様ニ夏トハ云キナリ

残花

此詞ニ古今ノ論アリ然レモ残字ハ其季ヨリ
 此季ニ残字ハ残ト云ル道理ナレ花ハ本ヨリ
 春ニ決シテ残ハ夏ト定レ惣シテ残葉残葉
 ノ類モ古式ハ一様ナラヌ故ニ付只ハ十色ニ意兼テ
 百世ニ論ノ断ル時ナレ譬ハ残葉ハ重陽ニ残レ
 任残葉ハ何ニ残レキヤ残字ハ總テ其季ノ次ニ
 取りテ此論ヲ残字ノ例トスレ秋冬之部ニ舉ルニ
 此ニ名ハ和漢ノ遠アリテ詩ニ牡丹ヲ春日ト成
 此歌ニ杜若ヲ春日ト成セト中右ニ誄語ノ如城

牡丹杜若

ヨリニ名ヲ夏ニ用タニ初夏ニ花ノ少キ故トフ

松竹落葉

古抄ニ松竹ノ落葉ハ新ナリ常盤木ノ落葉ハ夏ナリト云レト松竹ハ何ニ常盤木ナラヌヤ山館

白情ニ殊ニ面白キ物ナリニ只ハ決シテ夏ト定ムレ去ト落ルトハ詩ノ詞ニ散ルトハ大和ノ凡雅ナリ譬ハ桐葉ノ重ク落テ彼ハ散ル事ナシ非ス多ク女情ノ論ヲ知ラハ千式万法モ夏ニ明ナルレ

水芙蓉

此名ハ新撰ナリ夏芙蓉ハ和漢氏ニ秋ノ節ニ入レト水芙蓉ト云フ時ハ漢ニ蓮ノ一名トワ然レハ條ニ和ケテ水芙蓉ト續ス凡夏芙蓉ニ水

ヲ結スル散ルト云フ詞ヲ添テハ決シテ夏ニ用ナリ秋ノ芙蓉ハ陸ニ咲テ凋テ散ラヌ物ナリハナリ此類ヲ句作ノ凡例ト成スキナリ

老萱

此式ハ全ク新撰ナリ然レ凡老萱トハ本ニリ漢家ノ詩ニ出テ或ハ狂萱氏乱萱氏總テ暮春ノ物ナレト例ニ今式ハ加積ヨリ殊萱ハ勿論ニテ老萱モ夏ノ名ト成寸ハ萱ニ老ノ感情アリ凡雅ハ例ノ淋敷味ト云レ此名ハ夏ノ據ルナリ

萱附子

此式ハ例ノ當用ナリ○今按ズルニ萱附子ハ春草立テ夏詞ハ六月ノ間ニモヲ取目テ冬

至ノ比ニ唯習フ故ニ管字子ニ鳴字ヲ結テ冬季
ト成セルナリ然レハ管ハ尚習ミテ或ハ引管ノ
親ニ附ケ或ハ笛ヲ以テ引管ヲ教ヘ誓古ハ管
ノ尚ナレハ附子ハ決シテ管ト云イ笛ヲ結テモ管ト
知レ月^{ツキホレヒイ}星日^{ツキホレヒイ}ナリト引管ヲ最上ノ管トセリ

鳥巢

鳥巢ニ鶏ト都鳥トヲ加テ水鳥ハ總テ冬ノ下
世ニ鳥ハ歌道ノ秘直ナレハ冬ニ記サスト書捨テ
例ノ子細モナク新ナリト云ヘリ○今接スルニ都鳥ハ
指テ能器ノ用ニ非ス増テ秘直ナレハ論ニ及ハス鶏
ト云イ鷓鴣ト云ルハ本ヨリ水鳥ノ用アレハ巢ヲ結テハ

夏ト云スレ然レニ鳥ノ浮巢ト云ハ古式ニ新ト成セル
夏ハ水中ノ草ニ巢ヲ擲メハ水ノ増減浮沈テ四季
モ其後ニ捨置ク故ニ道理ヲ附テ新ト成セルト鳥
右巢ハ總テ去物ニテ其巢ヲ掛ル時ハ管ナレハ
浮巢ハ決シテ管ト定キヤ巢ニ用ナキハ尚作ニ
依ルレ鳥ノ別名ハ冬ニ部ニ論アリ

翡翠

此鳥ハ詩ニ名アリテ古抄ハ渡鳥ニ入タレト夏ノ谷
川ニ木陰ヲ傳テ決シテ夏後ト云ハ川蟬トナリ
此名ハ俗習ナリ或ハ海邊ノ別在ル或ハ船遊
ノ時ニ魚ノ新敷ヲ称スレ決シテ極暑ノ各用

沖鱒

此名ハ俗習ナリ或ハ海邊ノ別在ル或ハ船遊
ノ時ニ魚ノ新敷ヲ称スレ決シテ極暑ノ各用

ニテ世等ヲ例ノ貴賤ト云キナリ

返

世ニ只ハ京家ノ式目ニ多ハ秋ノ季ト成セルハ
案スルニ返ノ字ノ惑ニヤ甘夏ハ涼ヲ好シ秋ハ冷

ヲ惡ム天地自然ノ道理ニシテ世等ハ甘夏ト決ス
物ニテ古今ノ遠トハ天理ノ淑女情ヲ論スレテ文字
言語ノ名ヲ認ル故ナリ是ヲ千式ノ凡例ト知ナリ

○秋ノ部

花白田

佛舎ニ正花ナリ春ナリ細ニ空牙殿屋スレハ種
ノ理屈トト世分ニテ置カ能ナリト云ヘリ如何ナル

秘古又ニヤ知ラス○今擇スルニ花壇モ花白田モ決シテ

秋ニ定キナリ花園ト云ハ竹花ニ似タシ花園トハ

仰向キ白田トハ俯向ク夏ヲ能諾ノ淑女ト云テ種々

ノ理屈ハ今ノ用ニ非ス世等ヲ今式ノ有用ト知レ

桂花

世名ハ今ノ常用ナリ古式ニ春ノ季ノ説モアトト
地下ノ桂ハ花ノ角ナリ和歌ニモ月ノ光ヲ讀タハ

例シテ月ノ田名ト成シ秋ノ季ト定ルハ勿論ニテ

四季ノ詞ヲ結フ時ハ四季ノ月ニ用キナリ然レハ

有明既望ノ名ニ例シテ月モ星モ二句云フ植物

ニモ二句云キナリ

鳥鵲橋

古今抄ニ生類ニ非スト、
如河、鳥ニ三句去キリ、
鳩吹 此詞ハ種々ノ説アリト
キヲ吹テ鳩ノ真似ナリ

紅葉散

此詞ハ古式ヨリ且散ヲ秋ト云イ散トハカリラ
冬ト云レト花ト紅葉ハ春秋ノ艶色ニ

花ノ散ルモ春ナレハ紅葉ノ散ルモ秋ノ苦ナリ増テ
冬散ルハ木葉ト云イテ枯テ色ナキヲ用トセリ此等

ヲ古今ノ用捨ニシテ例ノ且字ニ及向敷ナリ

柏散

此柏ハ鳥傘ニ説アリテ論語ノ松柏ヲ證々トシ
コト見ハ新ト成セシモ愛ニ散字ヲ結テハ決メ
秋ト定ヘキナリ。○今按スルニ論語ノ松柏ハ松ト柏ト

常盤木ニヤ然ルラ六書正諺ニ柏字ハ柏字ノ俗書

ナリトヤ去ルラ大和ノ俗習ニ柏ヲカヤト訓シ柏ヲカハ

ト訓シテ此類ノ正俗ハ數多ナレト知テ誤ニ從ラ

因凡ノ故實トハ云レテ去ナカラ爾新ノ註ハ榧有美

實ニ而如栢トアレハ倭モ婿テハ榧字ヲモ用又榧ト

栢トハ異字同訓ト云レシ或ハ鳥傘ノ説ニハ紅葉セ

故ト云レト桐葉ハ紅葉セ子氏和漢通用ノ秋季

ナリ物シテ我家ノ真名遣ハ新字俗字ノ二論

アリ古今ノ兩用モ正諺ノ二様モ能證ハ例ノ俗ヨリ

從テ今日ノ用ヲ達スヘキナリ

椎裡栢

御筆ノ推下ニ紅葉セ又木ナレ推トカリモ秋
ナリ或ハ葉モ木モ秋ナリト云テ秋ニ用ル子細
ヲ叙セス然レハ栢トハ遠テ彼ヲ新トシ是ヲ秋ト忠
百世ノ惑心トハ世謂ナリ○今按スルニ推モ裡モ栢葉ノ
名類ハ全ク紅葉ノ沙汰ニ非ス落ルトカ拾フトカ
實ヲ結テ秋ナラ運實ヲモ實ナリト云レハ古抄ハ
如何トモ其故ヲ辨ヘス

新其高麦

世キハ例ノ貴散ナリ奈何トナレハ新ハ冬ニ
テ食フハ秋ナリ前後ノ働ヲ貴テナリ去レハ
茶ヲ摘ムハ春ニシテ新茶ハ頂次ニ實ト成セル速

ノ用ヲ知ル時ハ孔子ノ宣給フ不時ノ誠モ其時其物
ノ程ヲ知テ分外ノ珍奇ヲ好カレトフ

初鴨

世名ハ全ク新撰ナリ或ハ貴散ニ加減トモ云ハ
○今按スルニ奉膳式ニモ一鴨ト並ナカラ貴スル
所ハ秋冬ノ差別ナリ去氏見向ノ姿情ヲ論セハ初
ト云ハハ雅ヲ思ヒ初鴨ト云ハハ風味ヲ思フ多ク天眼
天目ト云ヘリ辟言ハ初ト音ニ喚ビハ風味ヲ先ニ思フヤ
鴨ノ冬ナルハ勿論ニテ初字ヲ添テ秋ト成スヘケン

野宮別

世式ハ林中ノ行事ニテ古式ニ世類ハ教多ナレト多
連歌ノ用ニテ他諸ノ平語ニ並用ナラシ然レ他諸

下学上達ノ道ナレハ夏ニハ等ノ一々ヲ奉テ公ニ承
殿上ノ凡例ト成テハ四季ニハ類ノ各ヲ透^{スクリ}来テ能^ル語
曲節ニ用ニトナリ去^ルハ野宮ハ後^ニ遊^ルト賀茂トニ在リテ
伊勢ノ衣冠宮ニ移リ玉^フラ野宮ノ別ト云^ハリト去^ルハ
羅祿ニモ哀傷ニモ非ス増テ意^ハ無^ク常ニモ非テ哀
ナル少^クモ多^クケレハナリ

○冬ノ部

枯尾花

此名ハ古今ニ論^リテ秋ニ云^フイ冬ニ云^フト枯^ル字ヲ
結^ステ冬ト定^ムシ其故ハ名^ハ之^レ木ノ枯^ルラ冬ト成^シ

残系

名^ハ之^レ木ノ散^ルラ秋ト成^ル色^ハアリテ枯^ルハ色^ナキ
故ナリ然^レハ名^ハ之^レ草モ其例ニシテ枯尾花ハ決^シテ冬^ト
此^レ亦^ハ諸抄ニ論^リテ伊^ハ重陽ニ残^リテ秋^ト
ナリト云^フト桃モ昔^モ其類ニ非ス然^レラ和歌
ノ公亦^ニ十月五日ヲ以^テ残^系ノ字ト云^フレハ宮内字
ニ及^ハズレテ決^シテ冬ト定^ムシ此^レ等^ヲ加^テ裁^ノ用ト云
ハシ残^系ノ字ハ總^テ残^系ノ例ニ效^シ

作鷲

此^レ亦^ハ全^ク當^用ナリ古抄ニ秋ニシテ雁^ノ部
ニ入^レト山雀日雀ノ類ニ非^ラテ作^ル鷲^ノ部
物ニ連^ニス民^ノ家ノ軒ニ割^テ馬^ノ防^ヲ傳^ヒ水^ノ棚ニ

遊ユウに声ノ清スく久クハ殊シ更ニ寒シレ増テ春ハ日ノ帰ルハ次ニ女ニ
モ見ミ子ノハ決シテ冬ト定シレハ等ヲラ姿ノ情ノ例ト云フ

木兔

ミツツ木兔モ例ノ新撰ナリ古抄ハ秋ノ部ニ入レトハ俊鳥
ニモ非ス名ハ鳥ニモ非ス増テ鳴ク聲ノ物ノ建ルハハ冥クテハ曆イ
一ニ故ニトヤ然ラハニ季ノ加減ト云フ夜鳴ク鳥ノ當用ト
云フ決シテ冬ト定シレハ或ハ鳥ノ部ノ類トカラ新ト成セル
ニ用アリテハ等ハ古抄ノ文ノ覺ト稱スレ

鴉

此鳥ハ倭名ノ火燒ナリ然ルラ古抄ハ渡鳥ノ部ニ入ル
ト其名モ其言ノ朝霜ノ氣色ト云フ秋ニ小鳥
ノ多クシハ久クニ部ニ跨リテハ名モ加減ト云フナリ

鳥

此鳥モ論セハ新撰ナリ御筆ハ鴉下ニ鳥ト都鳥トヲ
加テ新式ニ新ト云フ歌道ノ秘ト夏ナリトモ括テ例ニ
其故ヲ曉サ子ハ今日ノ用ニ立ニ難シ○今ハ梅スルニ路ノ鳥モ鴉
モ水ニ甘ク冬ノ差別モ通レハ果ラ結スハ新トモ云フケ
下ニ鳥ハ鳴ク聲ノモ寒ク氣ニテ俗語ニ搔キ井ト云フナレ
ハ能ク諸ニ各自ノ自在ヲ稱シテ冬ニ用アリハ冬ニ
用キヤ然ラハ路ノ鳥ノ部ノ類ニ勝リテ例ノ新ト成リ
季ト成リテ附合ハ當用ト云フキナリ

鶯子

此名ハ古抄ニリ啼ク字ヲ結テ冬ト成セレトモ
鶯子トハ各自モ長ケレハ啼ク字ナクモ冬ト定

一レ彼ハ冬至ノ此ヨリ鳴習フ故ニ其子ニ冬ニ用
 ハナリ増テ嘗ノ母鳴ト云ハ子ノ字ニモ及向敷
 世名ハ俗習ヨリ鴨ハ佳来ノ道ヲ定テ山ノ尾
 尾越鴨
 ヲ越ル故ニトワ然レハ初鴨ヲ秋ト成レ鴨
 ヲ冬ト成セル名ハ殊ニ能諧ノ用ト云ヘシ

綿入棉打

古抄ニ綿ノ夏ハ分明ナラス或ハ真綿モ木棉モ
 總テ冬ナリト云レト去ルハ附合ノ害アリシ綿
 ハ本ヨリ新ニシテ綿入ハ綿扱ノ對ナレハ入字ヲ添テハ
 冬ト定レシ或ハ棉打ヲ秋ト云レト綿ヲ摘ト云イ
 棉ヲ打ト云フ打ハ木棉ニシテ決レテ冬ト定レシ

棉取新棉ノ外ハ秋ニ非入或ハ綿帽子ハ衣類ニ
 非スト云イ綿ニ海風腸ヲ嫌フノ類ハ古今ノ遠
 ナレハ論ニカハス然ルヲ綿ト木棉トハ附テモ昔
 カラスト云テ琴綿ト木棉トノ類文アレト綿ト棉
 トハ莫堅切ニテ音訓ニ疑日ヲ又ヲ何故ニ附句ヲ
 嫌又ヤ古抄ニハ世類アリテ皆々論スルニ暇アラス
 爰ニ世綿ノ一名ヲ舉テテ万法ノ凡例ト成サハ其外ハ
 推レテ知キ古又ナリ

山路塔

世名ハ古来ヨリ論アリテ歎冬ハ山山路ニ
 在ルタレト和歌ノ題ニハ山吹ニ用事ナレハ頓

テ大和ノ故實ト成レリ然レハ中古ノ式目ニ露塔
モ露花モ同ク春ニ用テトモ名ハ例ノ者見
村脩ノ雪ニ結トモ露塔ハ冬ト定レ然ツトモ
露花ハ漢ニ夏鳩カ春雪ノ詩ヨリ春ト云ハシ
モ宜ナレト其名ハ指テ能諾ノ用ナシ露塔ハ祖
春ニシテ一物ニ用ノ例ト云キナリ

冬瓜 此名ハ能諾ノ自在ニシテ冬瓜ト春ニ喚ビ或ハ
カモフリト訓ニ喚テ中古ハ總テ秋季ト成セリ
去レト幸ニ冬ノニ子ヨリ霜ヲ待テ賞スル物ナレハ
西瓜ヲ秋トセル加減ヨリ冬瓜ヲ冬ト定メナリ

雪海苔 此名ハ俗習ニシテ或ハ加減ト云キナリ此物ハ
北越ノ各産ニシテ海邊ノ岩間ニ降積ス

ル雪ヲ波ノ中浸ス柏子ニテ凝テ海苔ト成レリ
トフ然レニ雪ヲ里ト訓セシハ白ヲ青ト云ハ美訓
ナラン〇今按スニ海苔ノ各ハ春甘夏ト復タレハ
雪海苔ト云テ冬ト成オハ例ノ爰誤ニ及ハスシテ
此等ヲ加減ノ當用ト云レシ

大根引 此詞ハ冬ノ當用ナリ大根ト略シテ音語ニ
讀レシ京家ノ大根引ニ效フ一カラス牛ノ房
モ同シ名數ナカラ引ト云ハスシテ堀ト云フ且ハ名

ハ秋ト知キナリ。○今按スルニ能諧ノ式同ハ新式ニ據
ラス古抄ヲ逐ニス今日世法ニ遠子ハ其ハ座ニ儘
其時ニ從ヒ其故ヲ論シ其為ヲ明メテ自己
ノ理ヲ出ラズ在サシハ其ノ所ヲ一世ノ血氣議ト知り
其所ヲ百世ノ明監ト知キナリ
東丈ト云ケ式の夜用と始メ節の食の公式より
終メ大根の俗習よりおのれに十餘條あり
て或ハ連年の有用あり能諧の可し用せり
一或ハ古今の遠同と云たり或ハ本節の
加減と云ふ事竟んけ式と云り千式

一方法の凡例きんをそとて能諧の微中
を失つて一筆万通の機変よりけ式の序詞
よするる事達の人と云へていして能諧一く四本子の
名れとありいささか能諧の誤不誤し能諧の
用可し用しきと云へて式と格削して自己のるた
といふ事きんよる百世の感とを能明ちる

○能諧ノ假名はくひ此事

大和ノ假名遣と云ふ事定る承々の物教
てら作らるる能諧ありと云ふ事書ハ紹巴の

字中あるより一文字の比北極りありとせしむると
 世くはついでに或と故実と云ふ物ありて志お
 と志とせしむる擬字と云ふと云ふしあの假名
 あるより一應字中し類字し音とせしめられし訓
 初の字や志とせし何故と捨れしあのみまはる
 ちらや字書と云ふと云ふしあの字ありし
 歌書のお教奇と云ふ例の及ぶ所ありし故実
 とも或とに傳と云ふ物ありし字と云ふはあ
 ともあしとのと云ふ法と云ふ法と云ふハハ
 たり通音と云ふ入音と云ふと云ふの字ありし

ちか。あしと云ふ。あしと云ふ。あしと云ふ。物の名
 てもあしと云ふ。調めやうと云ふと云ふ。北極
 とせしむる假名の風。柔と云ふ。まはるしと云
 へ。ふの軽重と云ふと云ふ。と云ふ。あしと云ふ。

假名遣の平。竟と云ふ。書法の字形と音韻の軽重
 と云ふ。用と云ふと云ふ。れい。と云ふ。余と云ふ。け。例と云ふ。考。一。知。一。

但し。假名の軽重と云ふ。と云ふ。白。園。と云ふ。

重と云ふ。黒。角。と云ふ。と云ふ。二。様。と云ふ。平。仄。の。相。紋。也。○。今。接。

と云ふ。假名の書法。の。連。能。の。考。と云ふ。い。あり。て。連。考。

の。假名。の。ら。に。能。潜。と。真。名。の。ら。に。假。名。と。

〇〇〇
い い り

いまく
いふ

鯉類
アサヒ
ヌマヒ

盥

盥 すすむるの器の時也
或ハハアハハ

紅
又ハハハ

仕宿

仕宿 宿のあきくすまひ

あきくすまひ

眠

眠 寝のあきくすまひ

あきくすまひ

侍

侍 つかさどりのあきくすまひ

あきくすまひ

此

此 かくらひのあきくすまひ

あきくすまひ

青

青 いろのあきくすまひ

あきくすまひ

東老云左はよひの設さうあきくすまひ
いふへの二用よりしきくすまひ

よ通ひるいふをふよ通ふなせと
音重といふへを辰の二音よ通ひと
くと唯牙の二音よ通ひ或は黒帯
ととの齒音の二通ひくすまひ
をまうとカキクケの豊しと定ま
えれと大和の国曲とて北字よ
きの助助おひとえれ我々の音律
北字はとちとひはまもも推定
和訓よくまくと恥とらふ
にいふを吹くめとく鯛と
三十五

とよを假名も又向と言語とに勤く
 勤くぬ款ありて物名をよき命を勤め
 へ鯛鯉のたれといの字やまうへて鯛鯉の
 おしおあしく物名あれとて假名もを
 次とちとてふはありて葉をあらふといとち
 さまとあやまて思ふとちるぬよふい
 辰吉のつとちあり離の因ふあ假名
 あれといへる音書の次とちあり但し
 次とちとて歌書よしとて別におとるたれせ
 みのよとてたれよ中めとあはしおあふの

おしあつめのつとちとて假名も勤く
 勤くぬとけおま教ぬあはし言語とち
 又向とあつとてさといとちとあつ
 のこしとても余しけ削よとてせつとて
 下の五品、古書の假名はつといとて假名
 といふたをりよなとて△獨權といふ假名
 けつといとて又向と言語とに或は勤く
 と勤くぬと或は書ると書くぬと或は
 上中下と用ると或は轉重とて心緩と
 或は口傳とて故実とてまわれ假名はつ

の事竟と和歌の撰集と武家の軍書
と假名と直名と也。そらりり假名は
はくまくとオトトトトトと其書の用
あれと一ゆるしと漢やもかんにあり
まろりと今此は物ありと万葉假名を
かまといふりひらくまろ直名とす。ね
よ一子う二子よとこいぬれいあといえのる程
とまろふはて同類をの声の感作をれ
い人よきふのわうい洞しとちよれとけと
されと能書の家よまろれと一席凡澤子

の同流すあといおのうといちねるる
はそり的好悪と撰集よとるといく
此我治と一席凡よとるまろねとけと
の可啼ある。圓角の二紋は軽重とまろ
むれい子文万子と一席よあまといひおと
せくといひおとねとまろねと多岐の
まろいあんとまろれい角撰の要とよ假名
いよちれと用といふと發百中の的語とまろ

○ ○
と 不

直名と。精と。まろ
蛇と。まろ。まろいあま也

古今抄

三十一

蓮ニ云々一假名はるひのそよよあつて古名
はるひのそよよはるひのそよよ新製あり
はるひの假名直名はるひのそよよと大和詞
助語をやうけて能階の文章此中四條と
あつりまがり△之後まがりけ温鯛を秘子庵
の遺稿よりとりて彼より五秘の二子色むし
え祿甲成の秘子や伊賀北西齋庵よりとりて
後持の裏の撰集のほつてにまじりたる文
稿とまじりて十卷篇の註換ありしに
前持の裏の直名文より幻住庵記より

懸^{タシキ}其楚の文論ありしを略^ニ云我が所て能階
の文章と和歌連系と林ありて家と一格
あつるともふくは漢と四六の文にありて指子
の体と隋秘旨あつんまくれの能階の手話あり
例の直名名からあつんまくれをまじりていお此假名此
形容と上と懸^{トシキ}鯉の羽の如く下と錯^{トニキリ}錦の服
と似たりとを和歌にもあつて連系もあつ
まじりて新製の原中袂衣の懸ある詞と
似て似てんまくれも今此文論と直名名と
返して返してぬの差ふあれいまとい世の舟の

の古きをあつていふ人多くはわの辨書もさういふく
例の字の者の二文字ともさういふまゝに藤栞と人と
沙人といふやうに書林といふやうにさういふは
了りて儒師の遺書もあつてその所とるの
法をいふことの中あつたはの奥の藤とはいふて
遺稿といふ下は密議あつんとやまゝいふく
廣狹と藤といふ師種と十大夫子の様書といふ
ひろさうの傳書といふ七十一の中の編定もせむある
まゝいふく遺書のの虚実あつんと例のおそれ
おそれまゝといふは式目の角撰といふと按い

はしりて密議とすといふはしや▲程授もりに假名
はしりて和漢の助語は通用とていふて假名
と直名とをいふといふといふは彼子月見録と文
格とをいふといふは和詞と助語とをいふ也

貞享式目之終

